

額などが見られるが、個人蔵のもの、下書レベルのもの、弟子が写したものなども多く、総量の把握は困難である。今後、いっそうの調査を重ねていく必要がある。

「当館本」と「書陵部本」とでは、色遣いや文字の書き込みなど、若干の違いが見られる。文字の異同については、末尾に文字対照表で示した。また、文字の位置を比較したところ、魯仙は画面に文字を書き込む際、全体の構図に配慮して文字の位置や配列（右から書くか左から書くか）を決めていたことが判明した。「当館本」では、空いたスペースに右から左へ文字が書き込まれるだけである。それでも、両者の構図は基本的に同じであるため、本稿では「当館本」の図版を掲載し、参考に供することとした。ただし、誌面の制約上、モノクロ図版となったので、カラー図版については、当館の展示図録『描かれた青森』（当館、一九九九年）や、前出の『砂子瀬・川原平の記憶』『砂子瀬・川原平を歩いた人びと』などを参照されたい。

【例言】

- (1) 魯仙による句読点「・」「は、適宜「、」「。」に置き換えた。
- (2) 校訂上の句読点として「・」「を追加した。
- (3) 割注の前の句読点は、割注の後に移した。
- (4) 漢字表記は原則として常用体を用いたが、原本の表記をそのまま残した箇所もある。
- (5) 各丁の替わり目は「」で示した。

（表紙題箋）
「安門瀑布紀行 全」

安門の瀧の道の記

陸奥の吾か津軽の郡の、西の山奥なる安門の瀑布は、音高く響きわたれる名区なれば、年まねく、見まほれとも、行路の、いと／＼峻峻しきよしにて、往見む人も稀なるから、促したつる者もなく、おもひやるへき便も絶て、いたつらに人伝にのミ聞たりしに、茲年文久二年壬戌のとしと云ふに、画の弟子なる、三上ノ仙年に、暴卒にうなかされて、水無月の朔日といふ朝びらきに、誰彼の人等と、九人伴ひ連て発途ける。故そのいゆき渉れる路の序を云むに、先、岩木の川の大橋をうち渡り、駒越、近名、真土の邑々をすぐるに、和やかなる空にしあれば、四方の眺望の艶麗しく、東は大城の高閣より、樋ノ口、悪戸、湯口の邸など、川を境ひて遠近に見えわたり、西は熊嶋、二本木、吉田の邑々、翠わたれる田の面に基布き、岩木の峯は、霞をこめて、高やかに進り立る景況、とり／＼に愛たき眺望なりしに、往かもしらに、龍口、鳥居野、如来瀬の村も打軼り、大久保の邸の頭より、杭人の山に躋らひて、音高かりし、大人の足跟岩とふを尋ね視るに、怪しきかも、奇しきかも、三尺に四尺はかりの岩の面に、一尺四寸はかりの足うらの形、石工の彫れる如く、きわやかに窪みて、指さへまてに見えたりき。偕こを視畢て、とばかり往て、左りに紆りて下れる処は、岩木の川岸なるに、大きき怪しの一岩とも、数まねて布足はし、川のあなだは、吉川、高屋、

関根、紙漉沢又はるかに五所の村まで、しむ木立の隈あひより、見えかくれにたつ列るなど、目かれも肯す見もてゆけは、早くも国吉の邑につきぬ。こはこれ雌谷の沢てふ初めの村にて、家の員は十ばかりとおほしきか中に、棟々しきもありて、其かうち酒かひせる家に立ちよそり、汗を洗ひ、酒飲ミ物なとたうべ、しまし憩らひて、又進ミ行しに、程なく桜庭の村なりしが、路ゆきぶりの序に、清水の観音堂にまゐてむとて、路の右なる鳥居を潜り、一丁許り往たりしに、たゞ五軒のふせ屋あり。此を清水の村と云とぞ。其が中に庭の端に鐘楼堂建たるは、御仏に仕へまつる家なるへし。こより杉の樹とも繁くして立ていと露けかるが、其中に一条の坂路を開き、石櫃を畳みたるを十四・五間も踏りゆくに、左りに小けき祠ありて、かしこくも天照します大御神を祝ひまつり、右に神楽殿を設けたり。又こより右に登れば僅の坦地にて、向ふ岸の岨の狭間より、いと潔き水のいさゝか流るゝあり。又御堂は二間に三間なるが、かの坦地をうしろに取なして岨中に建たるなれば、前の柱は六間ばかりも有つらむ。故こを都なる清水寺になぞへて、舞台としもいひしなるべし。すべて此区中は木立ふかく物古りて、いと肅然き地なりき。偕こを視をへて桜庭の邑に立販り、米袋、中野、中畑、と村なみに打過ぎしが、此村々はし、山のとおりに立並ばひて、大川の岸の上なれば、大「路せきて厳ひ立てる家なく、たゞ片側のミなりしが、川のほとりに田なんと聊見えたりき。かくて行々田代の村に至り、

渡し場に下り立て、そこなる景況を眺るに、五坂てふ浜の岸より、あやしき白壁の川中に突出たるはなはあり。高さ十支あまりは有つらむ横さまに線文を引のばへ、頂いミしく尖らひし処に、八尺ばかりの、もき木の、黒くさびたる一もと生ひ立り。其奇しく怪しき景況言もえられすて、暫時多ひてながめたりき。又渡し舟は、長さ二丈許りの丸木を堀りたる物にて、幅りは三尺はかりもあらめ、其をたぐ綱は、ネケウてふ蔓ものを、二継三継つき結ばひたるものなり。実に山家の気しき、いとむかしくなつかりき。かくて此処を去て、馴岱の村を過りて、二丁許りもゆき、岨路のなめなるを下らひ畢へ連は、右の方に、鐘が湾と名を負する淵あり。又かねとの淵とも云ひて、此わたりの一箇の勝地にしあれば、下り立て窺ひ視るに、向ふの岸は、竪さま横さまに聳へ出たる巖絶にて、巖の八十くますさまじかりしに、中腹より上は木々いしくしミ栄え、又此方の岸頭ハ、千重に八千重にしきもせる叢枝の中より、蔓なす異しき岩の二丈はかりなるが、いが／＼しく水の面に横たはれり。こに上りて淵を臨み視るに、浪もうねらす滄冥冥て、水の氣身にしみ、凄然くうらぶれたる景況そ云もえられぬに、里人ありて云けらく、此岸の岩根に、七箇の棚ありて、棚ことの奥深きは、一丈また四丈も有りて、「そは際に鱒てふ魚の多かるから、こを撮得むと潜き入るもの多なれども、誰も／＼久に息吞肯ねは、四つめの棚より下へ潜きしものなきを、ひとり砂子瀬の村の何某なるもの而已、

七ツに当る棚まで潜ぎ入りて視れとも、猶その深き底際はしらすとぞ。さればこは、雌谷の淵なる、淵とふ淵にこれに及ものなしと云へりき。又此横たはれる岩の傍に浮洲あり、こは豊熟としは飯七の形なし、着敷としは水酌の形なすて、その応験の違ふことなし、と語りしも、いと奇しかりし。偕此をいささか直違ひて、路の左に一基の鳥居あり。茲なむ、世に名たゝる新穂滝てふ名区なりと云へれば、いざさらばとて、各も／＼立入りたるに、八尺もやとおほしき岩二箇、路もせに立並べるあり。こを二王石といふとぞ。しかして此を久き行に、水流れ苔なめらかなる石碶の、いとぬれ／＼しき道を十五間許りも涉りて、向ふの面を眺棋を、高さも蹊さも、ともに十丈まりとおほしきが、頂には樹木いしく茂らひわたりて、いと／＼巖しき窟洞なりき。さるに其滝はし、檐なし覆へる頭より、提子の水を覆すかごとく、細やかに滴漂り下れる景況、いと佳美しく目もあやなるが、又滝の裏四間ばかり放れる奥に、横さまに聳え架せる枝岩あり。此を棚岩と号けて、そこに小けき祠あり。稲荷の大神を祝ひまつると云へり。凡て此区中は山の懐にして、日のかけ薄く昏冥く、露を深めて冷やぎたれば、氷も早く結はひて、玄冬に至れば山なし積りて、其壯観なる事は人ミなの知れる事にし有。れは今更に云はず、此水の大きき積上るとしハ豊年也と、正月の中旬、四方の入共多く来て、年兆を試し見る事也、故又世の中流ともいりし。さて此処を立去れば、両辺の山々漸々に逼りて岸するどく辣わたり、川また石むら繁かれは、淵なし、瀬なすて、さやき流れ、路また岩頭布並はひて、足

うらなやましたるを、或は踏り或は下れる中に、岸聳え岨崩頽て行きえかてなる所には、あやしめな棧を造れり。かゝる処を過りて川辺に下り立、とばかり行しに、二つの岩の巖ひ立てるありて、かの二王石のごとなるが、ことにけにふりはへて並へ置たるさまなりけり。此より直に坂路なれば、十四・五間も登りて、来しあとを目もはるに見わたせるに、岩木の峯は雲を凌ぎて中空にそそり、麓のは山しけ山は浪なしていや深くた、なはり、田代の村は木の間のくまに立並ばひ、右手なる山は、半腹よりいかしき巖の壁なして削れることに屹立わたり、左の山のはなれ磯は、右の岩根と参差ひたる隈の中を、大川真白く迂迴して、けさやかに流る、景しきなどいひもしらぬ観望なり。偕此処を立放れ、又しも上りつ下りつ辿り行ことしましにして、長表の邸に至れり。家の員はわつか二十に足らずと見やられしか、左の方のミになみ立り。又右なる大川をへなれて向ひ立る山は、名にしおふ鷹の巢てふ巖絶にして、或は横さまに聳え、或は竪さまに峙て、其形勢檐なしあり戸なしありて、いと巖しかるが、奥まりたる隈あひに洞なす裏の三つありて、鷹てふ鳥の棲栖と云へり。故此崖を鷹の巢と唱へしとぞ。高さは十ちまり八丈に及び、濶さは百丈に稍「踰ゆべく、頂には多くの木とも深くしきもおりて、すがひの隙にはあやしき柴・異しき蔓、翠の色の深き浅きをこきまじえて、引纏はひたるなど、すへての景況詞つまりて云もえられすなむ。偕又、此村の上の端の、右なる処に鳥居ありて、畑の中を

分けて一条の細やかなる路あり。こは岩室の観音に行道なりとあれば、いざやと促しつれて、已に四十間許りも行けるに、直に川辺に下る坂路なりしが、其傍にあり立る木どもの枝を組み葉を累ねて、天照す日も見えすなる処を、二十間まりすべらひ下りて川岸に着たり。右に樹の蔭凌ぎていよやかに峙てる巖は、すなはち岩窟の外面なれば、岩頭を便となして、斜に匍匐ひ伝ふに足うらしかと地に着ざれば、うちなづみ打なづみ、辛うして二十間はかりも踏渉れるに、直にまた四間まり這ひ躡りて、僅に岩窟の頭に至れり。口の高さは四丈にあまり、幅りは二丈の上を越ゆべし。奥程は二丈はかりも有つらむ。其処に大きき二箇の御室を居たり。その右にまた洞窟あり。高さ八尺許りか、いと闇冥くして深きを知るに便なし。又此岩窟に器へる崖もいと高ばり聳えて、頂には又樹木太くしきもし、藍なす水は、岩根の隈を流ひて怪しき文をた、み、二崖けやけく迫りて、をぞましくうらふれたる景況、身にしみわたりて肌寒かりし。扱こを視終り故の大路に立歸りて、又し進ミ行に、四方に廻回したる山々のいや重りたれと、路の傍はこけたく肇けて、上りつ下りつ盤廻りて二十丁許り行たるに、大川の辺に出たりき。幅り三十間はかりにして、岩ともまねく布足はせるを、八十瀬のくまの浅きをとめて、以漕ぎ渡り岸に上れば、高田・陸田も多なるか、向ふを見やれば、山のまほらの木立繁密せるひまより、軒のはし／＼見えたるは村市の邑なりけり。家の数は四十はかりも有つらむ。棟々しきも見え

て、田代の村や此方には又なき大村なるべし。こをわつか放りて豊岱と云て村市の属邸あり。此村の中程の右の方に一筋の道を開けるあり。こは世に聞えし、村市の毘沙門の祠にゆく路なればとて、又打つれてまか出るに、三十間ばかりにして、小く清かる溪流あるに、厚らなる板の、幅り一尺七寸はかりの物を二枚並べて橋に架せり。此橋のつめより、直に登り路にて勾り曲りいゆく間に、旧き新らしき鳥居の十ちまり立り。其かひはひに杉の木隙なく立並び、枝葉しきもして日のかけも背さす。露けき路を一丁はかり行に御堂の広前に至れり。石灯笼一器ひありていたく苦むすたるけしき、あはれいと深し。さて此御堂のうしろは坦然なる地にして、杉また所せく生ひ立るに、其か中に、一の杉、二の杉、三の杉と唱へて、殊に巨大なるもの三株あり。此一の杉を又池の杉ともいふ。人たけの処五丈まりの囲回なるよしにて、打視るより先おとろかれたり。根のもとより、五尺はかりの上の処に穴あり、幅り三尺余り、丈は七尺はかりなれとも、たゞ小けき穴のこと見ゆ。また空洞にして内暗く魚を知らず。偕此杉を池の杉とも号るハ、古き昔、片枝風に吹折られ、其あと穴を穿てるが、雨露久しく湛え、鮎の魚なと生りたればしか負せし名とぞ。又二の杉も三丈はかりの周囲なり。かくて此処を去り藤川の村を過て、川の傍りを行つる時、何鳥より有けん、声いと清く艶麗しく惋然玉を搔なす音の、彼方此方に聞えたれとも、鳥の形も見えさるうち、耳をそばだて、聞すますに、水底の

こと聞えたり。各も／＼いぶかりつゝ語りもて行に、後より一個の男の来れる有を俟て、いかなる鳥ぞと問るに、こは鳥に然す蛙なり、此辺なる蛙は、ミナ川中に住て斯鳴くものなり、と応たるに、いと異しくて、さらば其を一つ撰りて見せねと云へは、即て川に下り立、忽ち岩の狭間より二ツ取り来れるを視れハ、常「見る蛙より、さゝやかに細く瘦て脊はやゝ黒かりしに、各ものも、最珍らしとて又放ちやりぬ。こはこの世に云ふなる、井手の蛙と云ふものならめ、とはしめて思ひあはされし。さはかゝる涼しき声なれこそ、愛つたゝへて歌にも詩にも詠たるなるへし。山遠く放りたる、里の田のものなる蛙の、濁れる声のかましきを、いかで愛る事ありなむや。又かじか鳴くと云も此蛙にて、こをかじかとしも云へるは、その声音のさやかに涼しきは、妻恋ふ鹿の鳴く声に似たればとての名なるべし。きはめてかじかてふ小魚の鳴にあらすかし。偕行々、一の渡しといふ川の辺に着しに、岸のべにも川中にも、怪しく異しき嵐とも許多布並ばひ、或はつくね積てふ物の如く、瓜を積ミ累ぬる」ことく、或は臥し牛なし居れる墓なせるが、孔穿くあり礪々ありて、とり／＼に珍らしく、見過がてなる地にありける、あはれかゝる奇境の都辺近く有なましかば、はれ／＼しき名を負ひて、歌にも詩にも称へ揚られ、広く世に聞えてましをといと愛惜しかりき。偕此川はし、今し水そ涸たるよしなれとも、幅り十間まりなるに、ふねも無れば、瀬かしらとめて漕ぎ渡れるに、直に坂路なりしが、のぼり畢

へたる処に、杉また檜柏いと少しく生ひ立るが、其もとはなほち山ノ神岱の邨なり。家はわつか四間ありて、うしろの方は木々ししみて林をなせり。是より四面は木山・草山八重にたゝなはり、麓に陸田・水田を墾きて広らかなる地なるが、程もなく砂子瀬の村に「至りぬ。家は二十はかりも有なむか、此村のあたりハ、ミな陸田なるが、其繩手の道を軼れば、又一条の溪流あり、湯の沢と云ふよし。幅りは十間はかりとおぼしきが、いと低く箴橋を架せるに、編たる木ともいいと疎なかなれば、そのすがひや、早湍の水の足をひたし許りに見え、また踐わたるまに、いたく揺れ動きて、いとあふなかりしなり、又此流れの向ふ崖に路を□□てあるは、八光山てふ銅山に行道とそ。さて是よりいよ／＼山ふかくたゝなはり、往來ふ人の跡絶て、水のおとのミ寂寥く聞え、山の氣つよく、神吹風も身にしみわたれるが、しゝむ木立の根を横きり、露けき芝路ふみすたきつゝ、廿丁許り躡躍行しに、やかて日も暮なむとするころほひ、僅に川平岱の「村に暮て、何某なる家に宿歇ぬ。さて此里は、弘前より七里放りし西の山里にして、雌谷一郷の弥果なるか、舎員わつか二十ばかりも有つらむ。人素村に志情篤く、表面を飾ること肯しも知らず。其言語・挙動の穩ひしく、万つわざとならすて有のまに、物するなど、ほと／＼上れりし代の黎庶も、斯こそ有けめといと何恰し。すへて此雌谷の郷はし、山の幸得て世渡るなれば、物むツかしき。市に出るはいと稀なれば、大かた質素なる性なれとも、村市

の邑より上なる邨々は、わきて情意厚き風俗なりけり。偕明る二日の都ひらきに、きしの夜雇ひし引路のもの三個に、連たつし十個の人と、すへて十有三个伴にして、いそ／＼しく此村を發程安門の滝へと面するか、それか路の序を云むに、先ツ「邨の頭を出れば、いと肅然き郊原にてたと／＼しき芝路なるか、此面かの面に陸田・水田も疎かに視えたり。四面は草山・木山たち環列して、水の音など遠近に聞え、巨樹とももの処々に生ひ繁らひて、涼しき風の吹わたれるに、身の軽くおもほえて、二十丁許りも登り行しに、大沢といふ溪流あり。幅り六・七間ばかりか、水清く、岩にせかれて分れつ合ひつ流るゝ景況、いとおもしろし。又こゝに架せる箴橋をうち渡れば、直に登路なりしか、峽放れて広がるに、焼畑てふを処々に墾きて、豆粟なにと植たりしに、いかて斯物するそと尋ぬれば、こハ叢林を焼き、その跡へ種子をうゝれは、培ねとも好く実入る故なり。去れと三とせも経ぬれば荒けるから、こを打棄て、又異処を斯墾せるなりと応」き。実に山家のさまは、見も覚えぬ緯のミ多し。かくて登はかり往しに、左りのそかひの頭に、周匝一丈あまりの大樹の、根こじ仆れて路上を塞きてあるが、すつえ、はすえの幹を蔽ひて、十丈もあるべき間に幡輓り、巨根・細根おどろなして高く広がり、その跟二丈許りの穴を穿てり。をぞましく、けうとくて、眼冷る心ちなるが、引路の者の云ひけらく、此は茲年の卯月、某の日の暴風に吹倒されしにて、此山中に、まね／＼有れとも、斯風に仆れ又自

ら倒れたる樹は、大山すみの大神の忌セ玉へるものとて、茸木としも名を員セ、薪に碎かざるは柚子の掟なりと云へり。かくて此樹を潜きあへねは、よかして傍の草叢を踏すたきて、行々四辺を見放れば、連綿り環一匝し山々は、樹木いみしくしゝミ榮えて、黒ミ渡れる隈かけや、右手をさやりて流るゝ溪流あり。大川とも云とそ。こをうち渡り、石割沢、白木の岱、鍵かけ沢など云ふを軼れば、漸々に岨の逼りたるを、程なく安門の溪沼に至れるに、両辺の岸わきて峻しく聳えたるが、其頂に種々の樹とも、枝を垂れ幹を竦やかして、隙間なく立り。かゝる峽の八十瀬渉りて、二丁はかりも来つらむと覺しき処の、右手の岸に、長滝と名つけし小滝あり。高さは十ちまり二丈もあらめ、幅わつかに三・四尺と視なざるゝが岩頭にうち摧かれ、三条・四条に白糸なして、潺湲に落たる、なよひかに美しく、心の隈を洗ひたる心ちして、立去りかたき景色なり。又此滝をいさゝか放れて、岸の半腹に、堅二尺・横三尺ばかりの石の張り出たるあり。此石ハし、雨降らむとすれば玄くなり、霽むとすれば白く変りて、其応驗の更に違へる事の無れはとて、晴雨考の石と号けしとぞ。引路の者の云けらく、此石の根に、塩や涌けむ天津日の照りつゝきぬる時は、塩の凝りて白く吹出ること、をり／＼有と云へり。塩の山中に湧出るを、塩井と号けて有しこと、諸の藉に載たるなれば、こも決めて其たくひなるべし。さて此溪流を右に盤曲し左に紆余ひ、いこき／＼渡らひ行に、いさゝか淀める処ありて、

つかろの方言に、流し木と丸木割木の、長四尺に切りし薪材とも、許多満墮りて漕得がてねを、引路のもの云ひけらく、こは足を軽めてとく馳「渡り玉へ、徐々にわたりては木の反転るものありとて、自らその浮漂へる上を、急速く馳渡りて、又販れるさまは平地を往くに異ならねは、各も／＼しかせしに、誰彼てふ二個人等、踐失りて、忽ち川に陥り、腰の上まで水に滄りて越えたるなり。又是より一丁もヤ有らむ先に、又かの巨樹の、左の岸の上よりたふれ墜て、谿中に橋なして右の岸に幡腕れるを、枝を踐ミ幹を潜きて軼たりき。かく漕登りつゝ、行に、又一条の滝の、懸岸の上なる闇冥き樹間より漏落て、高さは六丈ばかり、幅また三尺まありありつらむ、いと佳と眺るうち、一陣の雲さやか来て、風冷やかに吹わたるに、実に深山幽谷とか云ふごと、いと物凄かりき。偕こを小原沢」といひて、流れの上なる中に、温泉の湧づると云へり。又此ほとりの岸壁は、白き、赤き、あるは黄なる岩の巖々しきか、五段・六段横さまに畳ミ累ねたる、惋然野交てふ幕を張たる如く、二丁許りに引延へたる、いと奇観なり。こをたむたら嶺と云とそ。すべて此溪中は、来し跡も往く先も、岸高く聳え、木々甚しく蕭勃りて、もるゝ日の影いと少なきなへに、露深くしゝみ渡り、冷冽かなる気は宙に昇りて、更に夏としもおほえぬが、実にみやまのけしきあはれ深く、いとうらふれたりしなり。又其岸ノ嶮壁は、匱を累ぬる如きあり。亀の甲の文をなすあり。雲の渦まく形の有あり。卵子を植なべたる

こと棘状あるあり。大きき穴の数まねく連布あり。又硫黄の槽なし、鉄の屑なしありて、或はいかめしく突いて険しくせき入て、或は檐の如くに蔽ひ洞穴の如くに彫れて、兪種々の色を帯たるが、それ等が墟隙に、奇しき柴異しき草とも、藤なし、蘆なし生ひ黄縁ひ、花開くあり、実なれるありて、とり／＼に珍らしく哀にして、目かれす視もてゆくに、往かまに／＼、進むかまに／＼、いよ／＼けしきの新革りて、眼を拭ひて仰き望るもの許多あれとも、称へて語る人もなきは、容易からぬ路にして、河門い渡るのミなりて、磊砢を伝ひ真砂を踐ミ、岸辺を扶服ひ木ぬれを潜き、いとも険しき路にしあれば、貴人は更にも勿論、文人墨客等も、大概は来もし視もせぬ幽僻地なるからなり。さて「右の、たむだら岩の名所を過ぎ、大原沢、柳沢と云ふをうち渡れハ、弁天嶺と号る岩あり。こは右手の岸より、角の生ひたるごとく、横さまに溪流の上に進り出たるものにて、四丈ばかりも有つらむ、立よそりて視るに、それと規定むへき形容はあらねと、二十間ばかり放りて望れば、仏閣なる梁の飾りの象頭と云ふに能く似て前の手なども正しく具はり、殆ど人の手に出たることく、奇はしく怪しきものにそありける。又此処の岸の頂は、殊に巨木繁密し、天津日のかげい照りわたらず、いと／＼闇冥く、露瀝りて衣を潤し、流水のくま／＼霏こめて、蕭寥き事はいもいへねは、一人二人の伴にては、能くは見あへぬ処なりけり。又此に連続する「嶮崖は、丸らかなる岩の、大きき数まねく積ミ累りて、

いと高く壁なし立る形勢は此弁天嶺の眺には、をさ／＼劣らぬ奇観なり。かくて茲を軼れば、漸々両岸攀け放りて、こけたき草野となれるに、其処に堤を築き柵を結びわたして、いみじく水を湛ハし、薪材とも許多浮ミて有しから、何ぞと問へは、引路の者の応へけるは、こは溪澗の水涸れ薪材たゆたひて、うまく流れあへねは、斯物して木の満盈を俟て、口を開き流すか料なりと云ふに、さらばそこを視てむとて、煙草吹つゝ休憩らひたるに、程なく樵夫等四・五人来て、壅塞る口を一図に切開くに、滝なす水の、勢ひ猛烈きにつれて、此木どもの、縦に突き横に押つゝ、展つ、転つ、鳴神の「轟く音なして、はるかに滝をゆく景況、いと目冷る心ちしける。さて是より一丁許りも進ミ行に、右より流るゝ溪あり。こを鬼河辺の沢と号けて、此処にて安門の溪に落合へるか、殊にたひろく撃けし所に、薪材を積重ぬるもいと多かりるを「巻と云ふ、さるもの二百巻あり。こは樵夫どもの、奥山より伐出せるを流し来て、此地に聚へたるものとそ。此傍に笹ふける小屋二軒あり。一軒は此積める木どもの員数を点検むる、吏人の居るところ、一軒は樵夫どもの居る処とそ。此辺をすへて鬼河辺と云ふ。茲を過て三・四丁はかり踏るに、又堤を築てあり。緯は前の条に同じ。茲より又漸々に咀かひ窄りきて、又し両つの岸の聳えたるが「頭は木の生ひ茂、右より流るゝ小溪を、金山の沢と唱へて、往昔鉛のかねの多に出しとなり。又左より来るを長瀬の水口と云ふ。又右の方の嶮崖を鷹落しと号けて、殊に高く崕えたるなれと、